

佐賀市文化財調査報告書第22集

佐 賀 城 跡

— 佐賀県公用車車庫建設に伴う
埋蔵文化財発掘調査 —

昭和 63 年

佐賀市教育委員会

例 言

1. 本書は昭和63年度事業佐賀県公用車車庫建設に伴い実施した、埋蔵文化財発掘調査の報告書である。
2. 調査は佐賀県からの委託により、佐賀市が受託し、佐賀市教育委員会が実施した。
3. 遺構の実測・写真撮影は調査を担当した福田義彦が実施した。
4. 出土遺物の実測・トレースなどの作業は調査員の指導のもとに島京子が行った。
5. 本書の執筆・編集は福田義彦が行った。

本文目次

1. 調査に至る経過	1
2. 調査の組織	1
3. 佐賀城の概要	1
4. 調査の概要	2
5. 遺 構	2
(1) No.1 トレンチ検出遺構	
(2) No.3 トレンチ検出遺構	
(3) No.4 トレンチ検出遺構	
6. 出土遺物	5
7. ま と め	6

挿 図 目 次

Fig. 1	位 置 図
Fig. 2	No.1 トレンチ出土遺構実測図
Fig. 3	No.3 //
Fig. 4	No.4 //
Fig. 5	遺構配置図
Fig. 6	遺物実測図
Fig. 7	佐賀城概略図
Fig. 8	測量基準点設定位置図

写 真 目 次

PL 1	発掘調査写真
2	No.4 トレンチ出土遺物写真

1. 調査に至る経過

昭和62年12月8日、佐賀県管財課から県有地に公用車庫建設計画が提示された。市教委は建設予定地は周知の埋蔵文化財包蔵地であることから文化財保護法57条の3に基づき、開発行為を行う旨の通知が必要であり、その後、埋蔵文化財確認調査を要する旨回答した。

調査費は開発者である佐賀県の全額負担とした。昭和63年5月19日付で、佐賀県と佐賀市の間で埋蔵文化財確認調査委託契約を締結し、同年5月23日から調査を開始した。その結果、佐賀城水路護岸基礎と考えられる遺構を検出したので、当初の発掘調査期間（昭和63年5月23日～同年5月26日）を延長し、昭和63年6月16日に終了した。

2. 調査の組織

調査主体 佐賀市教育委員会

調査担当及び事務局 佐賀市教育委員会社会教育課

教育委員会参事兼社会教育課長 山口 喜代治

社会教育課長補佐兼文化係長 中野 和彦

事務吏員 甲木 亮一

同上 木島 慎治

同上 福田 義彦（調査担当）

発掘作業員 宮地富士子、大宝美津枝、古川範子、片江 博

調査指導 佐賀市文化財保護審議会

会長 三好 不二雄

委員 池田 史郎

〃 堤 清治

〃 尾形 徳之

〃 城 秀男

〃 石井 常利

〃 金子 信二

調査協力 佐賀県教育委員会文化課、九州陶磁文化館、佐賀県管財課、(街)江下建設、

(株)富士測量

3. 佐賀城の概要

佐賀城は鍋島氏35万7千石の居城で、佐嘉城、栄城、亀甲城ともいう。慶長年間(1596～1615)の造営である。城の形式は典型的な平城である。城郭の回りは堀がめぐり、北堀が東西350間、(約664m)幅さ40間、南堀が東西435間、幅さ39～51間、東堀が389間、幅さ32～36間、西堀が南北398間、(約720m)幅さ39～40間を測る。その内側に天守、本丸、二の丸、三の丸をはじめとする建物や重臣の屋敷が存在した。現存の遺構としては鯨ノ門及び続櫓（昭和32年6月18日、重要文化財指定）、天



Fig.1 佐賀城跡遺跡周辺遺跡分布図

守台、城壁の一部、西堀、南堀、北堀がある。また、大書院や御居の間は維新後も残存していた。前者は大正9年まで学校の校舎・講堂として利用されていたが、解体され、その一部が市内の龍泰寺本堂の建築用材に転用された。後者は明治政府の民部卿大木喬任の出生地に移され、現在、南水公民館（水ヶ江三丁目）として利用されている。

4. 調査の概要

車庫建設予定地（面積1669㎡）にトレンチを9か所に設定した。基本的なトレンチ規模は2×10mとしたが、遺構を検出したNo.1、3、4トレンチは拡張した。

調査区は全面アスファルト舗装であったので、コンクリート・カッターを使用し、掘削はバック・ホーを用いた。この敷地は現在の駐車場となる前は佐賀成美高等女学校であったので、調査開始前には、その建物基礎で地下遺構はすべて削平、破壊されているものと予測していた。たしかに、江戸時代の生活面と思われる部分はすべて削平されていたが、地表下1.8mに水路護岸基礎を検出した。

5. 遺 構

調査はこの遺構実測、全体測量と、水路埋土から検出した磁器、瓦、木製品の採集を行った。

(1) No.1 トレンチ

調査区北西隅に位置し、調査面積は25㎡。水路護岸列石の最下段とその下部構造（木材基礎）を検出した。上面標高は1.84mを測る。列石は縦30cm、横40cm、高さ20cm程度の硬質で灰褐色を呈する。面取りは非常に雑であり、積み方は野面積みに近い。

木材基礎は幅約1mの範囲で確認。幅10～15cmの半加工木を20cm程度の間隔をとり、平行に置いている。No.3・4トレンチ検出の木材基礎にあるような「貫」は今回確認していない。この木材の一部に径5cm程度の穴（窪み）が設けられており、家屋用材の転用が考えられる。また、木材基礎周辺には裏込め石と同規模のものを入れ、基礎の補強としている。

(2) No.3 トレンチ

調査区北東部に位置し、面積は50㎡。水路護岸の木材基礎と裏込め石を検出した。木材基礎は、中央部のもので長さ3.8～3.9m、径10～12cmの自然木（松）を20cm程度の間隔をあけ、

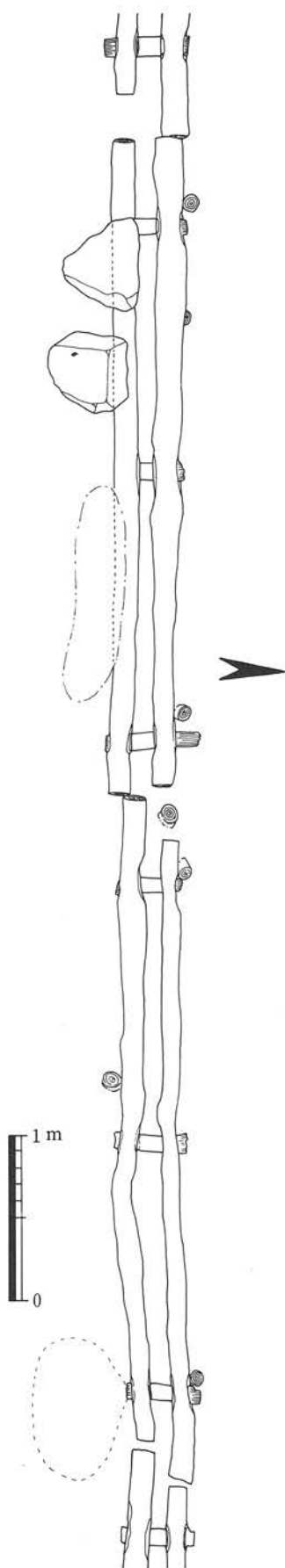


Fig.2 No.3 トレンチ
出土遺構実測図 (S=1/40)

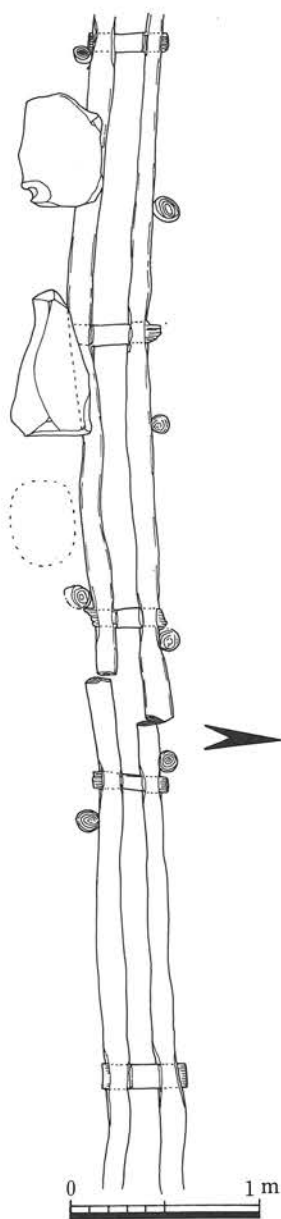


Fig.3 No.4 トレンチ
遺構実測図 (S=1/40)



Fig.4 No.1 トレンチ
出土遺構実測図 (S=1/40)

2本平行に置いている。両端と中央付近に用材が離反しないように「貫」を設けている。さらに基礎用材の前面・後面には径10cm程度の杭を打ち、用材の離反防止を重ねている。基礎木材上面の標高は1.98mを測る。

裏込め石は縦50cm、横20cm、高さ20cm程度のものを2個と碎石を検出した。すべて赤褐色を呈する。いわゆる「赤石」である。大型の裏込め石の一面には粗いながらも面取りが行われている

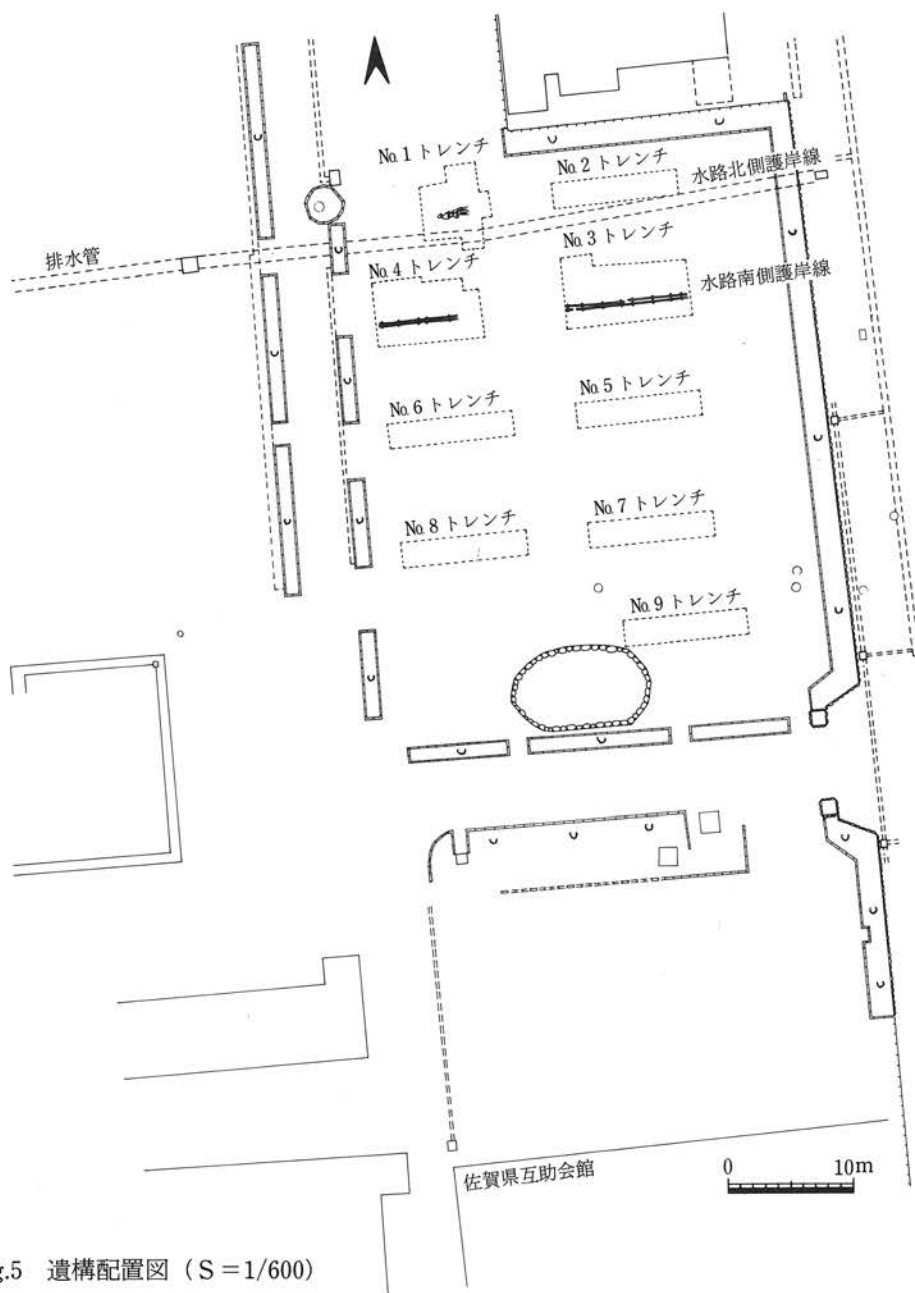


Fig.5 遺構配置図 (S=1/600)

ことから、ここから抜き取られた護岸列石にも、面取加工が施してあったものと推定する。

(3) No.4 トレンチ

調査区の北西隅に位置し、トレンチ面積は40m²。水路護岸基礎木材と裏込め石を検出した。このトレンチで検出した木材基礎はNo.3 トレンチの検出した木材基礎の延長であり、規模・形状はほとんど差位がない。

6. 出土遺物（概要 6 ページ）

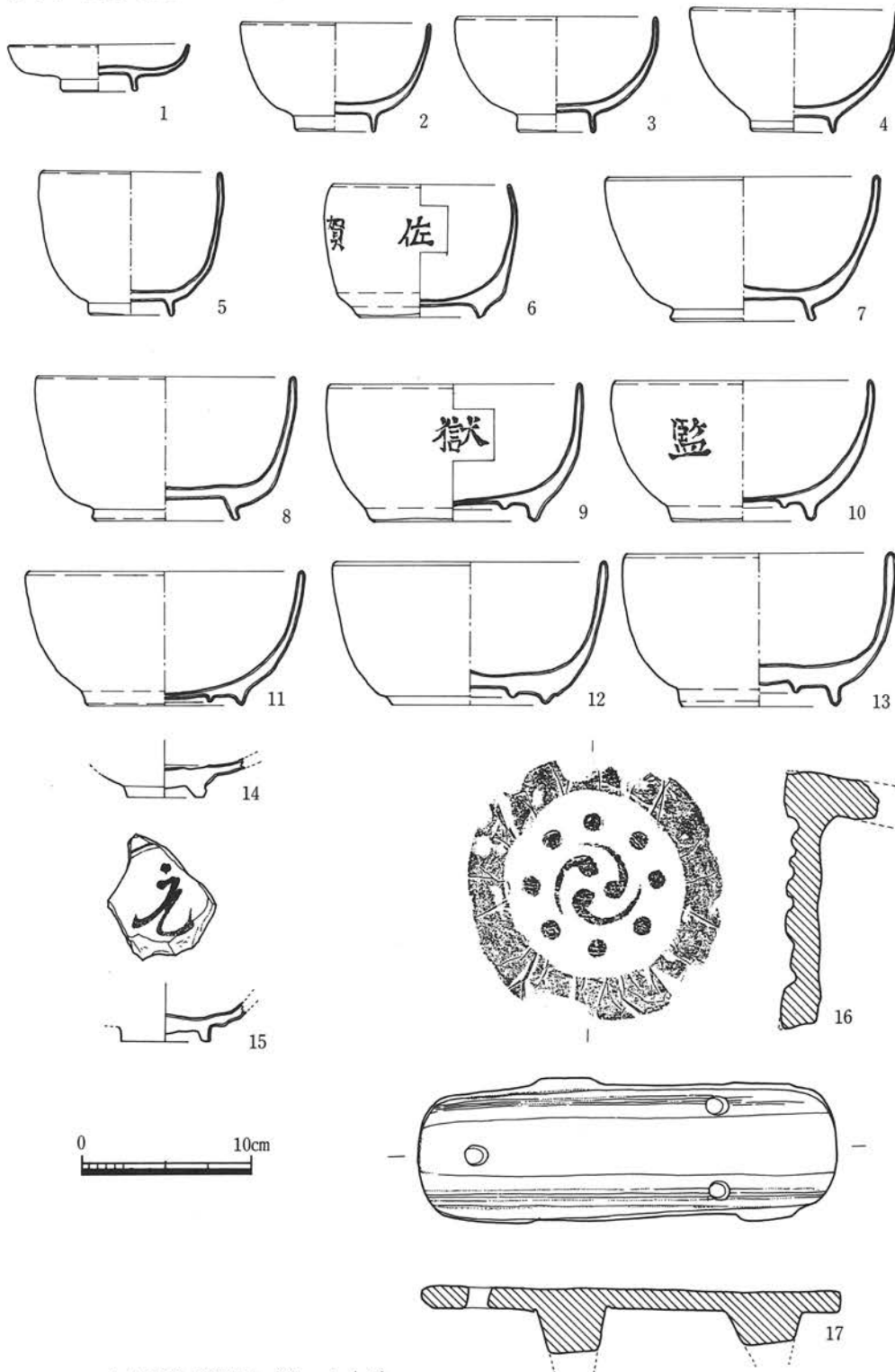


Fig.6 出土遺物実測図 (S = 1 / 4)

No 4 トレンチ下層から検出した。No 1～13は磁器で大正期の所産と考える。1は皿(又は蓋か)で口径10.4cm、器高2.7cm。2～4は碗で口径11.0～12.0cm。体部は内湾気味に立ち上る。6は2～4の一群との間に一線を引けるほどに体形に差位が認められる碗である。高台付近の器壁が厚く、体部は大きく内湾する。体部外面には「佐賀」の文字が認められる。これは紙に描いた文字を切りぬいて染め付ける、型紙刷り又は型紙絵付と呼ばれるものである。No 9、10の文字も同様である。7・8は大型碗で口径14.8～15.6cm、器高8.0～8.4cm、底径8.2cmを計る。No 9～13も大型碗であるが、高台が、二重高台となっている。口径14.6cm、16.0cm、器高7.9～9.0cm、高台外径8.4～9.3cm、高台内径4.2～6.0cmを測る。9に「獄」、10に「監」の文字がある。14、15は中国磁器碗。底径4.4cm・5.2cm。15には「元」の文字がある。時期は明末期。16は軒丸瓦。形式は巴文様で、左回りに尾をひく三巴を中心として連珠がめぐり、外側は幅の広い線を形成している。縁の幅15.6cm。17は下駄。長さ24.6cm、中央幅7.4cmを測る。歯は外側に広がり安定をよくしている。幅が狭いので女性用か。

まとめ

今回の発掘調査で次のことが判明した。

- 1、検出遺構は城内多久家屋敷と百間蔵との間に東西に走っていた水路護岸である。
- 2、水路護岸の工法が北側と南側とは多少異なる。
- 3、南北の護岸基礎(木材部分)の上面レベル差は12～19cmを測る。
- 4、水路が完全に埋め立てられたのは大正年代と推定される。

1は佐賀城分間御絵図(寛政8年〔1796〕)の縮尺を約600分の1と割り出し、現況の地図にあてはめてみると、今回検出した遺構の位置と一致する。水路幅は、木材基礎中央部間で約8.45mを測る。2は南側が基礎木材に自然木を用いているのに対し、北側は加工木を使用している。また、護岸石材は南が赤石を用いているのに対し、北側は灰褐色の硬度のある石を用いていた。3は木材基礎部上面の標高が、No 1 トレンチのものでは1.84m、No 3の平均値で2.03m、No 4の平均値で1.96mを測る。これは上に積む石材の高さを調整すれば、上面のレベルが平均化するので、元来、石垣上面のレベルが同じであったとすれば特筆すべきことではないが、違っていた可能性も否定できないので取上げた。4は出土遺物(磁器)の年代と、現存する大正年間の成美高等女学校平面図から推定した。磁器については九州陶磁文化館大橋・鈴田先生の鑑定によると大正期の所産で産地は嬉野町吉田皿山と推定されるということである。成美高等女学校平面図には、幅約5mの水路(暗渠か)が今回出土した水路位置に存在し、旧水路の敷地内に規模を小さくして記載されているので、少なくとも大正初年まではその溝が存在したものと考える。

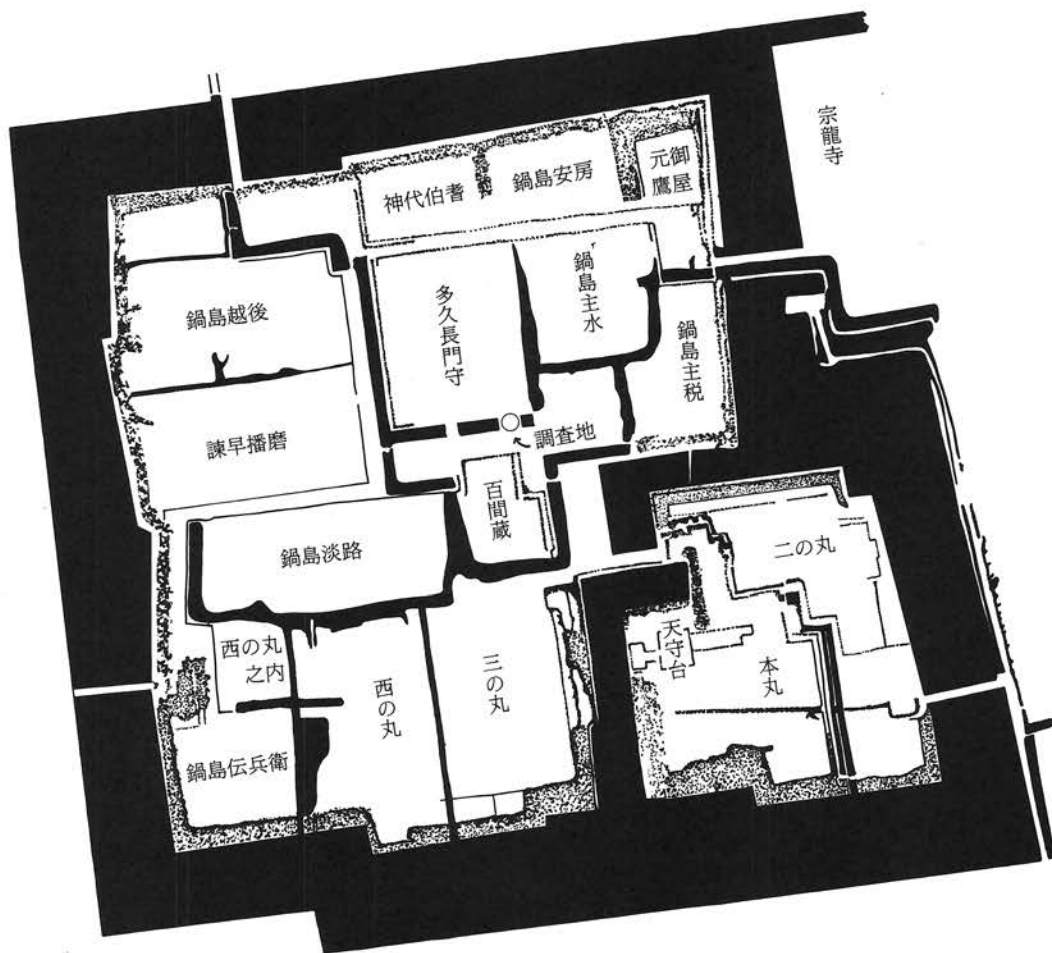


Fig.7 佐賀城概略図（佐賀城分間御絵図《寛政8年》による。）

佐賀城跡確認調査出土遺物一覧表

番 号	器 種	種 類	法 量	残存状況	用 途	出土遺構	時 代	出 年 月 日	備 考
1	皿	磁器	□径 10.4cm 器高 2.7cm	4 / 5	食 器	No.4 トレンチ	大正時代	昭和63年 5月25日	
2	椀	〃	11.0 6.3	3 / 5	〃	〃	〃	〃	
3	〃	〃	11.5 6.7	3 / 5	〃	〃	〃	〃	
4	〃	〃	12.0 7.25	3 / 5	〃	〃	〃	〃	
5	〃	〃	10.3 8.5	3 / 5	〃	〃	〃	〃	
6	〃	〃	10.2 7.8	2 / 1弱	〃	〃	〃	〃	
7	〃	〃	15.6 8.5	3 / 5強	〃	〃	〃	〃	
8	〃	〃	14.8 8.4	2 / 5	〃	〃	〃	〃	
9	〃	〃	14.6 8.0	1 / 2弱	〃	〃	〃	〃	二重高台
10	〃	〃	14.8 8.2	1 / 5	〃	〃	〃	〃	〃
11	〃	〃	16.0 7.9	1 / 2弱	〃	〃	〃	〃	〃
12	〃	〃	15.5 8.4	4 / 5弱	〃	〃	〃	〃	〃
13	〃	〃	16.0 9.0	3 / 5	〃	〃	〃	〃	〃
14	〃	〃	?	不 明	〃	〃	江戸時代	〃	中国陶磁
15	〃	〃	?	不 明	〃	〃	〃	〃	〃
16	瓦	軒丸瓦	径 15.6	〃		〃	〃	〃	
17	下駄		(長)24.6(幅)1.3 (厚)8.3(底)不明	鼻緒を 欠く	はきもの	〃	不 明	〃	
その他の 遺物	磁器 (25×30cmの保存袋 6袋)								

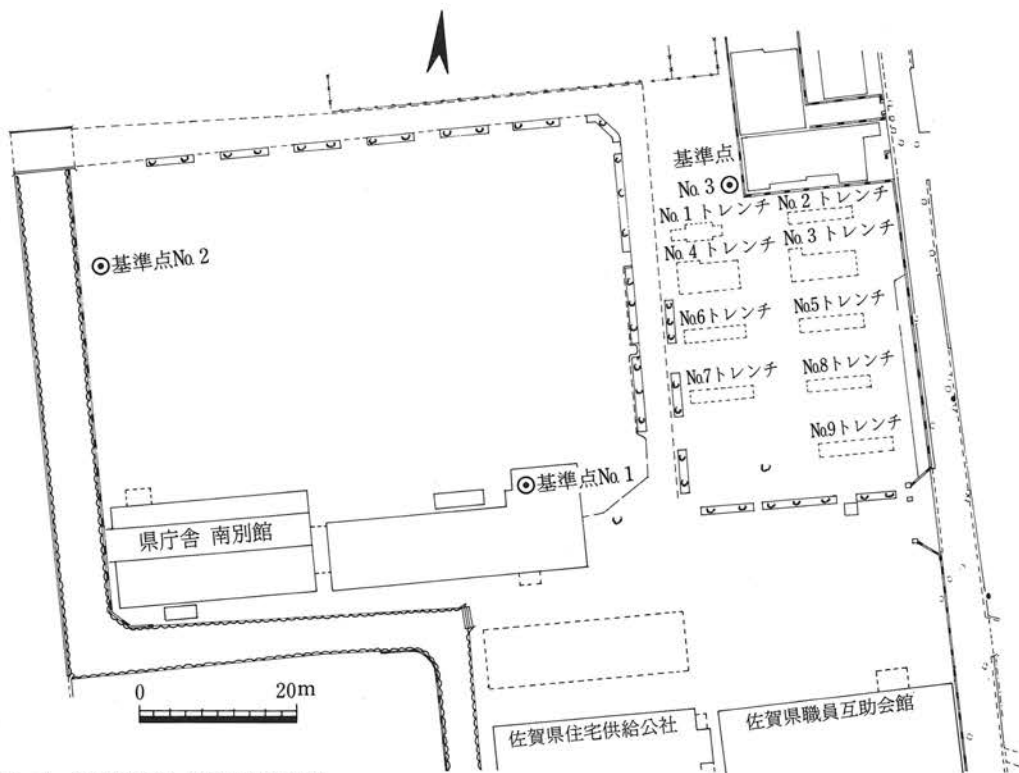
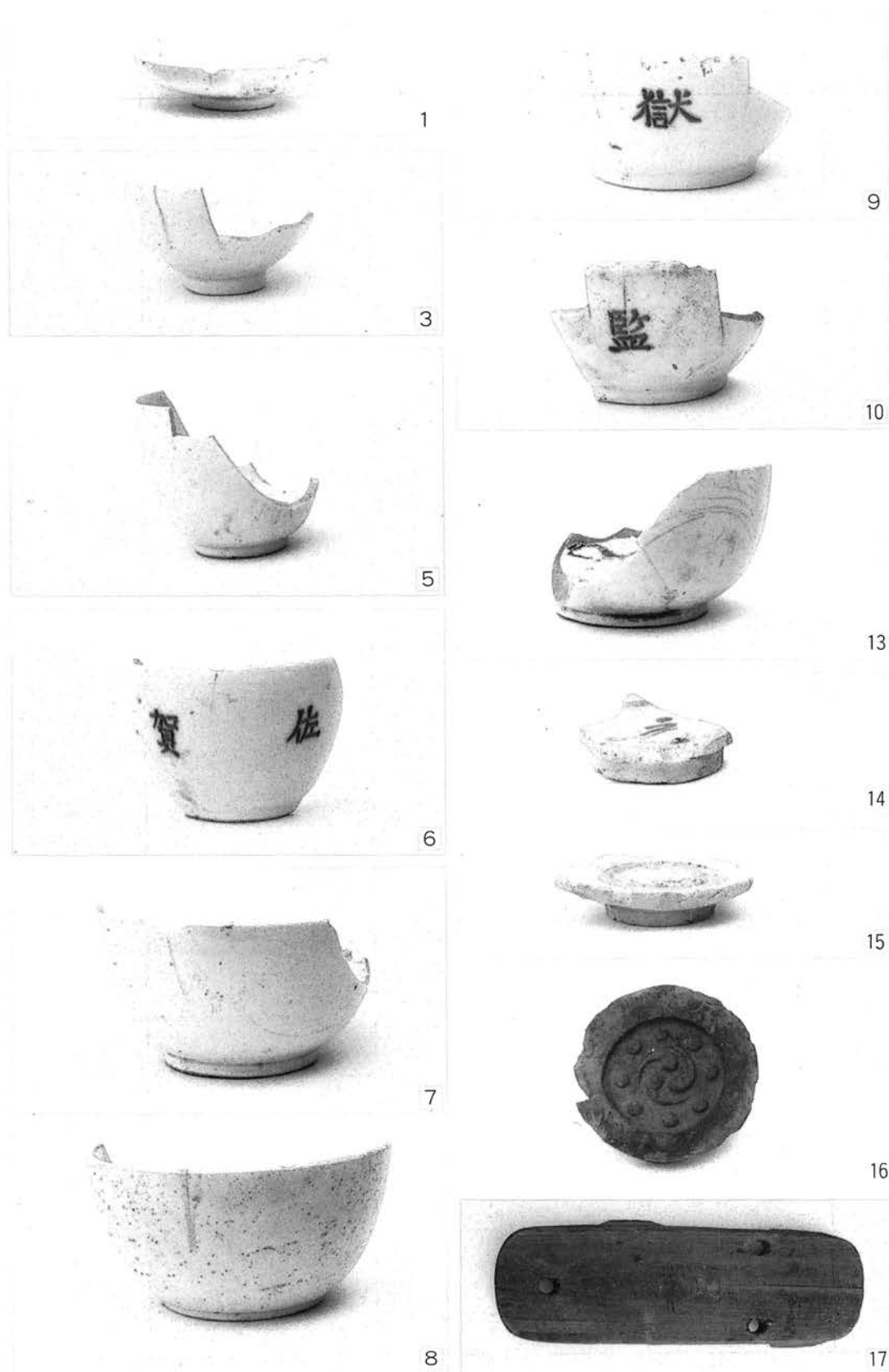


Fig.8 測量基準点設定位置図



1. 調査区全景（調査前）
2. No.1 トレンチ出土護岸基礎
3. 同上、木材基礎
4. No.3 トレンチ出土 はしご状胴木
5. No.4 トレンチ出土 はしご状胴木
6. 7. 同上（部分）
8. 調査区全景（調査後）



No. 4 トレンチ出土遺物写真

佐賀市文化財調査報告書第22集
佐賀城跡

昭和63年 9 月30日

発行 佐賀市教育委員会
佐賀市栄町1番1号

印刷 日之出印刷株式会社

佐賀市高木瀬町大字長瀬1136-55